

横田基地歴史シリーズの中で、朝鮮戦争の時代は最も短い期間に焦点を当てています。しかし、それはただ単に連合軍による日本占領から占領政策の終焉に至るまでの期間であっただけでなく、第二次大戦から冷戦を橋渡した期間でもあり、その短さとは裏腹に重要な時期でした。1950年6月25日から1953年7月27日まで、横田基地は朝鮮戦争の空爆作戦の中心にありました。基地には極東空軍爆撃軍団司令部が置かれ、空軍主力のB-29戦略爆撃機の基地として機能していました。

朝鮮戦争を支援するという新たな任務が課せられたその3年の間に、基地基盤整備のために東地区の開発が始まり、基地の人口は急増、基地内外に更に住宅が必要になりました。1940年代後期には横田基地の戦略的重要性はまだあまり認知されていませんでしたが、朝鮮戦争が1950年代から現代に至るまでの基地の重要度を揺るぎないものにしました。

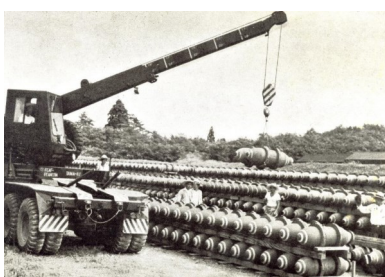


朝鮮戦争当時、横田のエプロンに並ぶB-29。遠景は狭山丘陵。

朝鮮戦争が1950年6月25日に勃発するまでの数ヶ月の間に、横田は朝鮮半島での緊張とは直接関連を持たずに再編を始めていました。1950年4月1日に第3爆撃航空団とその所属のA-26軽爆撃機が5年間の任務を経て横田を離れ、ジョンソン（入間）基地へ移動、代わりに防空の任にあたる第35戦闘迎撃航空団が置かれました。当時はまだ航空自衛隊が創設される前であったため、米軍が日本の空の防衛を担っていました。そのことから、非常に短い期間でありながら横田基地は日本の防衛に重要な役割を果たしたと言えます。

1950年6月下旬に北朝鮮軍が南進を開始した後の横田基地の部隊と機体の出入りの流れを調べると、いかに米軍の活動が激しかったかが分かります。

7月8日、ジョージ・ストレイトマイヤー中將の指揮のもとで横田に極東空軍爆撃軍団が発足し、朝鮮戦争を通してB-29の作戦を遂行しました。また第92爆撃航空群の3つの飛行隊、第98爆撃航空群の3つの



ずらりと並んだ爆弾に囲まれ、作業する当時の駐留軍要員。撮影地は現在の多摩サービスアネックス。この施設は大戦当時、陸軍火工廠多摩火薬製造所として火薬の製造をしていた施設である。

戦後この施設を接収した米軍は朝鮮戦争中、爆弾の集積貯蔵に使用し横田基地に送っていた。「多摩弾薬庫」とは通称で、この時期の米軍施設の用途に由来するものと思われる。ヘルメットなどはかぶらず、麦藁帽子で作業している。

飛行隊が続いて到着し、朝鮮での任務を開始しました。一方、第512気象偵察飛行隊が6月に、第31戦略偵察飛行隊が7月中旬に到着しましたが、それらの航空隊は12月19日に到着した第91戦略偵察航空隊に吸収されました。これらの気象・偵察部隊は気象観測用や写真偵察用など多様なB-29を飛ばし、横田は朝鮮戦争におけるB-29の出撃拠点となりました。

第35戦闘迎撃航空団は、8月までに朝鮮での飛行任務のため横田を去り、その穴を埋めるように同月ジョンソン基地から第3爆撃航空団の全部隊が戻って来ました。それも束の間、同年12月1日付けで第6161基地航空団と入れ替わり、同航空団の発足によって朝鮮戦争への対応で混沌とした5ヶ月間の末、横田はようやく落ち着きを取り戻しました。



1954年撮影。当時配属された軍人用のテントや仮の住宅が横田基地に現れたのが見てとれる。

現在、第5空軍司令部が置かれているあたりで、中央交差点付近に2012年に府中から移転し運用を始めた航空自衛隊航空総隊司令部の建物がある。

めまぐるしい部隊再編の一方で、基地運用に不可欠な施設となるB-29のための多数のハードスタンド（駐機場）を建設する大規模な工事が基地東地区で始まりました。その多くは今もなお使用されています。また基地内のあちこちには、新しく配属されてくる要員を収容するためのテントや仮設住宅が出現しました。

基地司令官は地元の空き地の地権者たちを訪れ、米軍人のための住宅建設を要請しました。その要請に応じて地権者たちは当時2車線だった国道16号線沿いに何百もの戸建て賃貸住宅を建てました。その住宅地区は、「アメリカン・ビレッジ」、「Japamer (Japan-American) Heights (ジャパマー・ハイツ)」、「福生ハイツ」と名前がつけられましたが、アメリカ人には「Paddy Houses (パディー・ハウス)」、日本人には「米軍ハウス」という通称で呼ばれていました。

それらの住宅は簡素な造りで、最初は電話線さえ引かれておらず、周囲の道路も未舗装のままでした。しかし、これらの住宅は基地内での住宅不足を補い、また基地周辺に今でも面影が残る独特な町並みを形成しました。

朝鮮戦争が未だ荒れ狂う



1950年代の写真。基地の外に建った米軍ハウスの一例。この頃、アメリカ人は日本に車を持ち込むことが許された。車は59年型キャデラック クーペ デビル。

中、1952年4月に日本の占領が終わりました。やがて、横田のリーダーシップはオープンハウスを開催したり、祭りや友好団体の活動への参加、孤児院などへのチャリティー支援、干ばつなどの自然災害発生時の近隣地域への支援を始めました。日本のコミュニティとの良好な関係はこの時期を起源としているのです。



1953年撮影。地元有力者にB-29スーパーフォートレス（超空の要塞）の視察ツアーを行っているところ。B-29の機首に、朝鮮半島の地図、ミグ戦闘機、多数の爆弾のマークが描かれている。

日本が占領されていた当時から地元との関係はありましたが、1952年からアメリカは再び日本と主権国家として関わることになり、日本人々との関係も変化し始めました。21世紀に横田に配属された誰しものが、朝鮮戦争時代に始まった地域との良好な関係を受け継いでいるのです。

1950年代初期の横田基地は、前述の賃貸住宅のみならず、雑役から技術職の仕事、また管理職の仕事までを日本人に提供した事においても周辺社会に大きな影響を与えました。

更に、日本に駐留する軍人が商店、バー、観光地へ行くことでも地元経済に貢献しました。また1950年代初頭の横田基地近隣は、まだ都市化されない農業地域であったため、航空機の騒音などの基地問題は顕在化していませんでした。（ドライバー氏はこのように記述しているが基地周辺の風紀の乱れについて加筆させていただく）終戦直後、日本政府は自発的に日本各地の基地近辺等に特殊慰安施設を設けたが、米側はその様な公娼制度を倫理上の観点から認めず短期間で廃止された。そのためもあり、自然発生的に米軍人相手の娼婦が福生周辺に集まり、朝鮮戦争の頃、町の風紀の乱れの問題はピークを迎えていた。記録ではその数が700人に達したとも言われている。基地司令官も事態を憂慮し軍人の福生地区への立入禁止を発令した。この命令は福生の町にとっても経済的に死活問題となり、町ではその対策として既にあった東京都売春等取締り条例を更に強化した町独自の風俗取締り条例を制定し浄化の徹底を図った。また街娼対策のひとつとして特定の



1954年12月9日撮影。朝鮮戦争は終わっているが、これから偵察任務に飛び立つのか西日を浴びる第91戦略偵察航空隊のRB-29と搭乗員。

夜間作戦のために機体下面を黒く塗っている。

地域を設定し軍人相手の風俗営業をそこに限った。いわゆる福生の「赤線」の誕生である。（この部分は福生市編纂事業の市史研究誌「みずくらいど」7号（1988年緑陰）に掲載の「市史研究調査ノート⑦立ち入り禁止令と福生ホーム」を参考にさせていただき、記述した。）

朝鮮戦線の支援に忙殺される日々の中、近隣に衝撃を与える大きな事故も起きました。そのひとつは1951年11月18日に発生したB-29の墜落事故です。燃料と爆弾を満載したB-29が離陸に失敗し、東京都北多摩郡砂川村（現：立川市砂川町）に墜落炎上。搭乗員は無事脱出することができましたが、不運にも搭載していた爆弾の爆発により基地消防隊員10名と基地周辺住民5名の命が奪われました。またこの時、基地内の建物の窓も吹き飛ばされただけでなく、近隣の多数の民家や施設が被害を被るという大惨事に至りました。空軍は被害を賠償し、また、消火作業中に爆発で命を失った7名の日本人消防隊員と3名のアメリカの消防隊員を追悼する「ラスト・アラーム」と文字を刻んだ慰霊碑を1972年に建碑しました。その碑は、現在も横田消防署本部の前で見ることができます。



今も毎月磨かれている慰霊碑「ラスト・アラーム」。この事故で、基地消防隊員10名のほか、基地の外の住民も被災し5名が亡くなった。

他にも別のB-29が、1952年2月7日の吹雪の夜、基地の北に位置する埼玉県入間郡金子村（現：入間市西三ツ木）に墜落し、搭乗員13名全員と住民4名が亡くなり多数の民家や施設が損傷を受ける事故がありました。横田はその事故によって家を失った地元住民に食糧を供給したり、学校近くの土地に仮の住居を建てるなどしました。それは当時、空軍が日本人々との関わりをもったもうひとつの例です。

朝鮮戦争は1953年7月27日に休戦となりました。こうして、横田は次の時代 — 冷戦の時代 — を迎えました。

今回の記事：冷戦時の横田

Yokota Air Base History